



Title	イーゴリ遠征譚（訳及註）3
Author(s)	木村, 彰一; Kimura, Shoichi
Citation	スラヴ研究, 3, 85-92
Issue Date	1959
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4939">https://hdl.handle.net/2115/4939</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113132.pdf



# イーゴリ遠征譚

(承前)

木村彰一 訳

79. ああ！はるけくも鷹は飛びしよ、むら鳥をほふりつつ、——かの海さして！
80. イーゴリのたけしき勢を、はやよみがえらせるすべはない。
81. 泣き女は勇士らのあとをしたって泣きさげび、慟哭の声はロシア全土をはせめぐる。
82. ロシアの国の女らは、火の角の燠あおりつつ、
83. «今ははや、いとしの夫を、心に思いやることも、わが胸にうかべることも、まのあたり打ち見ることも、ましてやこがね、しろがねを手にとることも、かなわぬ仕儀とはなつたわいの»と涙ながらにかきくどく。
84. はらからよ、きけ、キエフは悲嘆のうめきを発し、チェルニーゴフはまがつみに泣く。

81. 「泣き女は...はせめぐる」——J За нимъ (P нимъ) кликну карна, и жля (P Карна и Жля А Карнаижля) (P,) поскочи (P по скочи) по Руской земли. (P, A .なし) карна と жля はふつう polovecy の汗の名(ただし単なる想像),あるいは(Vs. Miller 以来)抽象名詞の擬人化と解釈され,したがってまた大文字で書きはじめる P の綴り方が多くの校訂者によってそのまま踏襲されています(例えば Lixačev, 17, 420; Nahtigal, 38, 78 参照).これにたいして, Jakobson (La Geste, 85-6, 275) は, карна (= \*каръна < карити “死者をいたむ”)を「泣き女」(вопленица)と解し,また, жля (Cantare による; La Geste では желя)は желя “慟哭”の e が graphiquement に ь と混同され, ついでその ь が何度めかの筆写のさいに書きおとされてできた形と考えて,この2語のはじめの字を小文字にあらためています(この解釈は A. Obrębska-Jabłońska, 126-127 によっても採用されています).また, Lixačev (87) は, кликну, поскочи が単数であることを無視して кликнули Карна и Желя, поскакали по Русской земле と訳していますが,ここは, J のように карна のあとに (,) を打つにしろ,打たないにしろ,当然, кликну карна と жля поскочи のふたつの文がいわゆる chiasmus をなして接続詞 и で結ばれていると解釈するのが穏当でしょう.なお, желя は古代の文献に用例の多い語ですが,とくに興味ふかいは,年代記 Ipatij 本の, Kajaly 河畔における Igor' 軍の敗北を記した箇所にも,この語が用いられていることです: господь... в радости мѣсто наведе на ны плачь, и во веселье мѣсто желю на рѣцѣ Каялы (N. K. Gudzij, Xrestomatija, 73 による) “Kajaly 河畔において,主は...喜悅のかわりに涕泣をわれらにもたらし給い,また歓喜のかわりに慟哭をもたらし給うた。”

82. 「火の角の燠あおりつつ」——J Смагу (A はこのあとに людемъ を挿入) мычючи въ пламяне розѣ PA は розѣ のあとに (.) をおき,この分詞構文全体を J 81 の поскочи にかけており,多くの注釈者たち(例えば Lixačev, 17)もこれに従っていますが, Jakobson は PA の (.) を (,) に訂正したうえ,この句を次の J жены Руския (P Руския) въсплакашася (PA въсплакашась) にかけて解釈しています.なお,「泣き女」も「燃える燠のはいった角を持つ女たち」も,異教時代の葬礼の慣習にもとづく形象であることは疑いありません.

84. この箇所については,年代記 Ipatij 本 1185 年の項にある次の記事を参照: то бо слышавше, взятошася городи посемьские, и бысть скорбь и туга люта, якоже николиже не бывала во всемъ Посемьи, и в Новѣгородѣ Сѣверьскомѣ, и по всей волости Черниговьской, князи изымани и дружина изымана, избита; и мятяхуться акы в мотви, городи воставахуть... (N. K. Gudzij, Xrestomatija, 75 による) “これをきくと, Sejm 河沿岸の町々は混乱におちいり, Sejm の全流域, Novgorod-Severskij 及び Černigov の全流域に,いまだかつて見られなかったほどのなはだしい憂愁と悲嘆とがあった.公たちはとらえられ,また従士らもとらえられ,みな殺しにされた.人びとは,あたかもわなにかかったごとくあわてふためき,町々は騒然となった...”

85. うれいはロシアの地をひたし、哀傷ははてしもしらずロシアのもなかに流れ入る。
86. 公たち、蝸牛のあらそいにくき身をやつすそのひまに、
87. 邪教の勢は勝ちに乗じてロシアの国に攻めかかり、家ごとに一匹のりすのあたいを貢のしろにとりたてる。
88. ロシアの仇のいきおいを、早くももり返させたるは、誰あろう、かのスヴァトスラーフの雄々しい二人の忘れがたみ、イーゴリ、フセーヴォロト。この両公が父ともたのむキエフの都のいかしき大君スヴァトスラーフ、いかづちのごとき勢威もて、いったんはその仇をとりひしぎ、おののかしめ給うたものを。

87. 「家ごとに一匹のりすのあたいを貢のしろにとりたてる」——J (=PA) емляху дань по бѣлѣ отъ двора この句は、年代記 Lavrentij 本 859 年の項にある次の有名な記事を思い出させます: А козари имаху на полянѣх, и на сѣверѣх, и на вятичѣхъ, имаху по бѣлѣ и вѣверицѣ отъ дыма (Pov. vr. let, pod red. V. P. Adrianovoj-Peretc, Moskva-Leningrad, 1950, t. I, 18). “そして hozary は poljane と severjane と vjatiči から一戸につき銀貨一枚及びりすの毛皮一枚ずつをとりたてた (бѣлѣ и を бѣлѣи と読めば “銀貨一枚及びりす” は “白いりす” となる).” しかし, Slovo の書かれた 12 世紀後半には, бѣлка, векша, ないし вѣверица は “りす” を意味するほかに, 最低の貨幣単位でもあったようです (La Geste, 119) から, Slovo の бѣла もそう解釈することができます. もっとも, あるいは Lixačev (421) の言うように, “家ごとに一匹のりすのあたいを貢のしろ” としてとったという表現は, 単に polovcy が南ロシアの人民をみずからに隷属させたというだけの意味しかないのかもしれない。

88. 「ロシアの仇のいきおいを、早くももり返させたるは...イーゴリ、フセーヴォロト...スヴァトスラーフ...その仇をとりひしぎ」——J (=PA)...Игорь и Всеволодъ уже лжу убуди, которую то бяше успиль...Святъславъ... Lixačev (18, 421) は伝統的な解釈に従って лжу убуди, которую то を убудиста которую, ту と訂正し, лжа (=лъжа) を коварство (половец) と解し, котора は Igor', Vsevolod 両公が, 彼らの “父” (отець) なる Svjatoslav Vsevolodovič の命令に従わず, 独断で polovcy にたいする遠征の軍をおこしたことを指すものと考えています. Nahtigal (38, 79), Obreḡska-Jabłońska (104, 127) もほぼ同様. ただし後者は лъжа については, Potebnja, Barsov などの説に従って, これを “敵の力” (wroga siła) と訳しています (La Geste も同じ: “вражья сила”—Jakobson). La Geste は P 及び A のテキストを, そのまま意味がとれる場合はみだりに変えないという原則によって, которую то の 2 字を生かしたのでしょう. ただし, которую то のように, “小詞” то を現代ロシア語と同じ職能で使っている例が, 古代の文献にほかにも見いだされるか否かについては, べつに言及していません.

「この両公が父ともたのむ...スヴァトスラーフ」——J отец (P отецъ) ихъ Святъславъ この Svjatoslav は Vsevolod Ol'govič の長子で, Igor' の遠征当時 Kiev の公であった Svjatoslav Vsevolodovič (1194 年死) を指し, 従って Igor', Vsevolod 両兄弟の実父 Svjatoslav Ol'govič とは別人です. Igor', Vsevolod のいここにあたるこの人物が, 作者によって “父” とよばれているのは, まず第一に, 彼が, 当時のロシアの諸公のうち, 系譜的に言って最古参事であった, という理由によるものです (J 112 で, Svjatoslav は, Igor', Vsevolod 両兄弟にむかって, О моя сыновча “わがふたりの甥たち” とよびかけています). しかし, そのほかに, 作者がことさらにこの言葉を用いたのは, Kiev の公位の持つとくに重要な政治的意義を強調するためでもあったと考えることができます. そして作者のこの意図は, わずかに Kiev 市を領有するのみで, その周辺地域にたいする支配権はすべて Rjurik Rostislavič (†1211) に握られていたほど弱小な公であった Svjatoslav (Lixačev, 422 参照) が, Slovo では “キエフの都のいかしき大君” (J Святъславъ грозный великий Киевский) とよばれ, また Svjatoslav らの polovcy にたいする 1183, 1184 年の勝利が華麗な hyperbole の手法によって描写されていること (J 88 “いかづちのごとき勢威もて” 以下, J 89 のおわりまで) から明瞭にうかがわれるところです. すべての研究者たちが一致して認めているように, 諸公が Kiev の公を中心として力を結集し, 一致協力して外敵にあたる以外にロシアを救う道はない, というのが Slovo の作者のいだいている熱烈な政治的信念で, これは作品のあとの部分にますますはつきり反映するようになります.

89. げにやこの公、一騎当千のつわものどもを引き具して、フランクの太刀ふりかざしつ  
つ、ポーロヴェツの地をおそい、丘をも谷をも馬蹄にかけ、河、みずうみをくまなく  
濁し、早瀬、沼地をことごとく乾し、神を信ぜぬコビヤークをば、海の入江のほとり  
にむらがるポーロヴェツの鉄の陣より、つむじのごとくひっ立て給えば、さしも名に  
負うコビヤークも、キエフの丘にそびえ立つスヴァトスラーフが館の広間に、無残や  
どうとくずおれたのだ。
90. さればドイツびと、ヴェネツィアびと、またギリシアびと、モラヴィアびと、もろ声  
にスヴァトスラーフのほぎ歌うたい、ありあまる宝をばカヤルイーの底に沈めたイー  
ゴリ公をそしてやまぬ。ことわりかな、ポーロヴェツの河また河は、ロシアのこが  
ねにうずまるばかり。

89. 「げにやこの公...」—J Своими сильными (P сильными) плъкы (A полкы) и хара-  
лужными мечи (PA このあと ; ) наступи на землю Половецкую, (PA ; ) притопта хльми  
и яругы, (PA ; ) в'змути (P взмути) рѣкы (P рѣки) и озера, (PA ; ) иссуши потоки (P  
потоки) и болота, (A ; ) この一節には, Zadošćina に次のような parallel passage があります:  
A сильные полки ступишася в мѣсто и притопташа холми и лугы, и возмутишася рѣки и  
потоки и озера (Undol'skij 文庫本; La Geste 319 による)。

Svjatoslav Vsevolodovič は 1184 年, つまり Igor' たちの遠征の前年, Rjurik Rostislavič その  
他の諸公とともに polovcy を攻めて大勝を博し, さらにその前年, 1183 年の 7 月 30 日には Rjurik,  
Vladimir Glebovič その他の諸公とともに, Dnepr の左の支流 Erel' 河畔に polovcy と激戦をまじ  
えてやはり勝利をおさめ, 有名な Kobjak (または Bonjak) Karlyevič, そのふたりの子, その他  
多数の貴族をふくむ約 7000 人の polovcy を捕虜としました。“丘をも谷をも馬蹄にかけ” 云々は  
1184 年の, また “神を信ぜぬコビヤークをば” 云々は 1183 年の戦勝を指すものと思われます。

「海の入江のほとり」—J из (PA изъ) луку моря, луку は, dual になっていますから, Don  
河口の両側の Azov 海沿岸地方を指すものでしょう。Kobjak の根拠地はこのあたりにあったと思わ  
れます。M. Szeftel (La Geste, 119) は, Don の右岸, Rostov の北に, 現在 “Kobjak の窪地”  
とよばれる場所があることを指摘しています。

「スヴァトスラーフが館の広間」—J въ гридницѣ Святъславли (A Святъ славли) гридница  
は公の館にあった従士たち (гриди<古代ノルド語 grid “かくれが”) の溜りを指しますが, これが身  
分のある捕虜を收容するにも用いられたことは Novgorod 第 1 年代記 1216 年の項にある次のよう  
な記事に徴してあきらかです: Ярослав въбегъ въ Переяслалъ, повеле въметати въ погребъ,  
что есть новгородьць, а иныхъ в гридницу, и ту ся издъхоша въ множествовѣ (Novgorod-  
skaja pervaja letopis', AN SSSR, 1950, 56) “Jaroslav は Perejaslavl' にげこみ, Novgorod 人  
全部を地下牢に, 他の者を gridnica に入れることを命じた。そして, ここで多くの人びとが死んだ。”

90. 「ありあまる宝をば...ロシアのこがねにうずまるばかり」—J кають (A каютъ) князя  
Игоря, иже погрузи жиръ во днѣ Каялы: (PA : なし) рѣкы Половецкыя (P Половецкiя)  
(PA ,) Рускаго злата насыпаша. Lixačev (88) は P の解釈をそのまま認め, рѣкы Половец-  
кыя を Gen. Sg. (Каялы の同格名詞) ととり, かつ number のちがいを無視して, насыпаша を  
погрузи と同じく иже の述語とみなしています。これにたいして J は иже にはじまる関係文を  
Каялы で打ちきり, рѣкы Половецкыя を Acc. Plur. (насыпаша の補語) とし, これ以後を新し  
い文(いわゆる “неопределенно-личное предложение”) と見るわけです。ただし, PA の punc-  
tuation だけを変えたこの読み方は, Cantare のそれで, La Geste では Каялы—рѣкы Половецкыя  
...насыпаша. となっています。つまり PA の aorist насыпаша を能働過去分詞・男性単数対格  
насыпавша に変え, иже の前にある князя Игоря の定語としたわけです (この構文については,  
たとえばいわゆる “Skazanie o Borise i Glebe にある次の文を参照: Господи Иисусе Христе, иже  
симь образъмъ явися на земли, изволивый волею пригвоздится на кръстѣ... [N. K. Gudzij,  
Xrestomatija, 45 による])。これは文法的に無理のある Lixačev の解釈よりも合理的であり, A.  
Obrepska-Jabtonska (104, 152) もこれに従っていますが, Cantare では PA のテキストを (punc-

91. かくてわがイーゴリ公は、こがねの鞍をのりすてて、とらわれびとの鞍に身をおく。  
 92. ロシアの町の胸壁は惘然として声を呑み、たのしかりしさざめきもいまはとだえた。
93. おりしもあれ、キエフの都の丘のうえなるスヴァトスラーフ公、ひと夜あやしの夢を見給う。  
 94. のたまうよう、  
 «ゆうべ、夜いまだふけぬに、誰やらん、いちいの寝床に予をねかせ、  
 すみぞめのきょうかたびらを着せてからに、  
 95. «苦味のまじった青い酒をばしきりにくんで予にさしおった。  
 96. «して、神を信ぜぬペチェネークらが用いるという、矢を抜いた矢筒のなかから、大粒の阿古屋の珠を、さらさらと予の胸にあけ、

uation 以外)しいて訂正する必要がないと認めて上にひいたような読み方に変えたのでしょう。拙訳はこの Cantare の読み方によりました。なお、同じ本のなかの R. Poggioli のイタリアの語訳 (“... Igor, che sprofondò... e colmò...”) は、どういうわけかこの読み方を生かしていませんが、La Geste, 86 には可能な訳し方のひとつとして “On a rempli de l'or russe les fleuves koumans” というフランス訳をあげています。

93. 「キエフの都の丘のうえ」——J въ Кіевѣ на горахъ Kiev の гора とよばれる地帯は、いわば“山の手”にあたり、軍事・行政機関の所在地として、商業地区である“下町”(торговище)と対立していました。年代記 Lavrentij 本 1068 年の項にある次の記事を参照：... и людье кыевстии... створиша вѣче на торговищи... И начаша людие говорити на воеводу на Коснячка; идоша на гору, съ вѣча, и придоша на дворъ Коснячковъ... (Pov. vr. let, op. cit., 114) “...そして Kiev の人びとは、下町で人民会をひらいた...そして人びとは司令官 Kosnjačko を誹謗しはじめ、人民会から山の手に行き、Kosnjačko の邸に押しよせた...”

ところで年代記 Ipatij 本によれば、Svjatoslav が Igor' の敗戦を知ったのは、実は彼が Kiev でなく Černigov にいた時のことでした。“この時、Vsevolod の子 Svjatoslav 大公は Karačev [Desna 河の左の支流 Snežet' 河にのぞむ町——S. K.] におもむき、上流諸地方から戦士たちをあつめていた。彼はひと夏をかけて Don 河畔の polovcy を攻めようとのぞんでいたのである。Svjatoslav が帰って、Novgorod-Severskij のほとりにいたとき、彼はおのれの兄弟たちが、彼に秘して、polovcy 遠征におもむいたことをきいた。そしてこのことは彼に不愉快であった。Svjatoslav は船で進み、Černigov まで来たが、そのとき Pros の子 Belovolod が走って来て、polovcy のもとでおこったことを Svjatoslav に告げた (N. K. Gudzij, Xrestomatija, 74 による; 原文省略)”

94. 古代ロシアに行なわれた風習として、死体はまず黒いきょうかたびらでつつみ、ついで新しい衣服を着せたらうえ、さらにもう一枚のきょうかたびらでつつむことになっていたといえます (La Geste, 121)。

96. 「神を信ぜぬペチェネークら」——J поганыхъ Тлъковинъ (Р тлъковинъ А тлъковинъ) “тлъковинъ” は年代記 Lavrentij 本 907 年の項 (Oleg による Byzantium 遠征の記事) にも出て来ますが、意味はよくわかりません：... поя же [Олег] множество варяг, и словень, и чюдь, и словене, и кривичи, и мерю, и деревляны, и радимичи, и поляны, и сѣверо, и вятичи, и хорваты, и дулѣбы, и тиверци, яже суть толковины... (Pov. vr. let, op. cit., 23). Lihačev (89) は “иноземцы” と訳し、さらに注 (425) では、この言葉が“(ロシア周辺諸地域に住む諸種族からつのだ) 通訳” (V. M. Istrin) の意味であるにせよ、あるいは “союзники, подручники, данники” の意味であるにせよ、とにかく Слово の “поганые тлъковины” が、polovcy にたいするたたかひにさいしてロシア諸公に味方したいわゆる “свои поганые” (torki, berendei, kovui などの) を指すことは間違いない、と言っています。La Geste はこれを pečenegi と解し (A. Obrębska-Jabłońska, 152 も同様)、Nahtigal は толочься (=толкаться в людях, шляться, шататься—Dal') から派生した名詞と見て (81), “遊牧民” (kočevniki) と訳しています (41)。拙訳はかりに La Geste によりました。

97. «さてねんごろに予をいたわるのだ。金色の屋根もまばゆいわが高殿のたるきを見れば、はや親梁が失せておった。
98. «宵のうちから、夜もすがら、灰色からすがなきつづけ、
99. «プレセンスクに遠からぬ丘のふもととおぼしきあたりに、荷櫓が一台あらわれ出たと思うまもなく、青海さしてひかれて行ったわ»

「矢を抜いた矢筒のなかから...予の胸にあけ」—J (=PA) тѣщами тулы... великий женчогъ на лоно La Geste (232), Nahtigal (80)がともにひいている N. Toll' の研究 (“O žemčuge v sne Svjatoslava,” Seminarium Kondakovianum, Praha, 1936, 300)によれば、この箇所は紀元前3世紀のギリシアの著作者 Phylarkhos の伝えている次のような Skythai の風習が12世紀のロシアにも知られていたことを示すものごとくです。その風習というのは、Skhythai は、毎夜、寝る前にえびらに小石を入れるならわしであった、その日、自分が幸福だったと思えば白い石を入れ、不幸だったと思えば黒い石を入れた、さて人が死ぬと、他の人びとがそのえびらをあけて石の数をかぞえ、故人の生涯が幸福であったか否かを判断した、というのです (なお La Geste, loc. cit. が指摘しているとおり、王族が小石のかわりに真珠を用いたことは大いにありうると思われる)。Toll' のこの考えが正しいとすれば、“えびらのなかの真珠を胸のうえにおとした”という Slovo の表現は当然“死”を暗示するものと解することができます。Lixačev (425 f.) は、真珠を“涙”の象徴ととり、Igor' が敗れたのは、彼の軍に加わっていた“поганые тльковины”のひとつである kovui の敗走がその因をなしているのだから“поганые тльковины のえびらから真珠を胸のうえにおとした”というのは、Svjatoslav が kovui の敗走による Igor' のとられを知って涙を流したという意味であろうと言っていますが、これはかなり牽強附会の感じがいたします。

97. 「親梁が失せておった」—J (=PA) безъ кнѣса この表現が“死”を暗示するものであることはほとんど疑いがありません (La Geste, 350 参照)。なぜなら、人が死ぬと屋根に穴をうがち、そこから死体をはこび出すことは、よく知られた古代ロシアの習慣だからです。年代記 Lavrentij 本、1015年の次の記事を参照：Ночью же межю двема клѣтми проймавше помость, обергѣвше в коверъ ѿ, ужи съвѣсиша на землю; възложьше ѿ на сани, везьше поставиша ѿ въ святѣй Богородици... (Pov. vr. let, op. cit., 89) “人びとは夜中に二つの部屋の間にある床板に穴をあけ、彼 (Vladimir I Svjatoslavič) をじゅうたんに包み、綱で彼を地下におろし、櫓にのせて運び出し、聖母教会に安置した (なおいわゆる “Skazanie o Borise i Glebe のテキストもほぼこれと同様; N. K. Gudzij, Xrestomatija, 42 を参照)”。

98. 「灰色からす」—J бусови (P босуви А бо-суви, врани この訂正は Vs. Miller 以来、たいていの研究者によって採用されています。Dal' は бусъ (“темно-голубо-серый, буро-дымчатый, сизобурый”)しかあげていませんが、бусеть / бусовать (“синеть, сереть”—Dal') の doublets があることを思えば、бусъ / бусовъ のそれも十分に可能であると思われます。「灰色からす」もまた“死”の予兆であろうと思われます (La Geste, 350 参照)。

99. 「プレセンスクに遠からぬ」—J У Плѣньска (А Плѣнь ска) ふつうは年代記にも出てくる (除村吉太郎訳, ロシア年代記, 491, 555 参照) Galič 公国の町の名と解されています (ただし Lixačev, 427 は Kiev 近辺の町と推定)。Jakobson (La Geste, 350)によれば、ロシア軍が Bonjak のひきいる polovcy にここで惨敗を喫したといういい伝えが Ukraina に行なわれているそうです。

「丘のふもと」—J (=PA) на болони La Geste が “в подгорье” (192), “au pied de la montagne” (57) (Cantare, 141 では “sul declivio”) 等と訳してあるのによりました。ただし、これらの訳の根拠は不明です。болонь は Sreznevskij には “низменное поречье, покрытое травой, pratum littoreum, aquarum eluvioni objectum,” Преображенскій には “заливной луг, низменность,” Dal' には (болонье) “низменная луговая равнина у реки или озера” とあり、Nahtigal (41) もこの解釈をとっています：“na (močvirni) loki.” 他方 Lixačev (89) が на болони を “в предградье”, А. Obrejska-Jabłońska (152) が “na podegrodziu” と訳しているのは、Dal' に (болонье, болонье) “ближайшая окружность города, предместье” とあるものによったものでしょうか。いずれにしても、にわかに解釈を定めがたい語のひとつです。

100. 貴族たち、かしこまって答えるよう、  
 101. «わが殿。われら、悲嘆のあまり、はやこの胸もつぶるるばかりであります。  
 102. «思えばかの二羽の若鷹、トムータラカンをばおとさんとて、あるいはせめて、ドンの水をばかぶとに汲んで乾さんとて、こがねなす父祖の玉座をとび立ったると見てあるに、はや邪教徒の刃にかかり、無残やつばさをそぎおとされ、その身はむなしくくろがねのかせはめられてもがくのみ。  
 103. «たたかうこと三日にして、世は暗澹たる闇にとざされ、天日二つながらに光を失い、もえさかる火の柱二つながらに消え失せて、もろともに海に沈み、新月また二つながら闇にかくるる有様。

「荷櫓が一台…ひかれて行ったわ」——J бѣша дебръски сани (P дебръ Кисаню А дебръ Кисаню), и несоша я (PA не сошлю) къ синему морю. PA のテキストが訂正を要することはあきらかですが、その仕方は学者によってさまざまです。Jakobson の読み方は古くからあったもののひとつですが、ただふつうの解釈のように (例えば N. K. Gudzij, Xrestomatija, 64, 脚注) сани を“竜”(змеи) とはとらず、現代ロシア語におけると同じく“櫓” ととる点がちがいます。Jakobson はまた дебръски сани を“дровни”(=“сани… для возки дров, лесу или тяжестей” —Dal') と解し (La Geste, 87), J 97 の「親梁の消失」、J 98 の「灰色からす」と同様、やはり“死”の予兆と考えます (La Geste, 350)。その理由は、櫓が季節をとわず死体の運搬に用いられるいわば柩車の役を果たした、ということにあります (例えば上の J 97 の注にひいた年代記の記事“възложыше ѿ на сани” [Vladimir I Svjatoslavič が死んだのは 7 月 15 日!] や、La Geste, 87 もあげている Vladimir Monomax の有名な「教訓」(Poučen'e) の冒頭にある“сѣдя на санех”(Pov. vr. let., op. cit., 153; =“s'approchant de la mort”) の句を参照)。この櫓、しかも死体をのせるための充分の大きさを持った дровни が、Igor' の敗戦の場所に近い“青海”(=Azov 海) の方へひかれて行った、という Slovo の表現は、Igor' 軍の壊滅を暗示していると考えて少しも無理がなく、この意味で Jakobson たちの解釈はとくにすぐれていると思われます (ただ、強いて言うなら、debръски の意味のとり方に多少の難点があるかもしれません)。Nahtigal は、マタイ伝 xxiii, 33 opheis, … pōs phugēte apo tēs kriseōs tēs geennēs が南ロシアのいわゆる Jur'evskij aprakos で zmija… kako uběžite otъ suda dьbrьskaago と訳出されていることに注目して dьbrьskъ を“iz deber”(“谷から出て来た”) と解し (82), P бѣша дебръ Кисаню 以下を бѣша дьbrьсци сани и не съшли къ синему морю と読み, “so bili iz deber zmaji in niso odšli k sinjemu morju”(竜が谷から出て、しかも青海の方へ去らなかつた) と訳しています (41) が、元来 moravisme であってロシアの文献にはほとんど用例のない sani (=draco; チェック語 san 参照) がなぜここに出てくるのか(上掲福音書のテキストの opheis は zmija と訳され、しかもこの zmija は文法的には dьbrьskaago と何の関係もない複数呼格です)、またそれがなぜ青海の方へ行かなかつたのか、また бѣша が aorist であるのに съшли が perfect であるのはどういうわけか、ということについてはなんら説明していません。また Lixačev (19, 89) の新しい解釈 бѣша дебръ кияня, и несошася къ синему морю (=стоял киевский лес, и понеслись [вороны] к синему морю) は stylistic な難点があるうえに、debръ が単数なのに、動詞 бѣша がなぜ複数なのかをあきらかにしていません。

102. 「トムータラカンをばおとさんとて」——J поискати града Тьмутороканя (А Тьмутороканя) これは Igor' の遠征の窮極の目的が、元来は、Igor' もそのひとりである Ol'goviči の勢力範囲であり、当時おそらく polovcy の手中にあったと思われる Tmutarakan' の奪回にあったことを暗示するものごとくです。J 29 の注参照。

「ドンの水をばかぶとに汲んで乾さんとて」——J испить шеломомь Дону J 13 と同じ表現で, “Don 地方を征伏しようとして” の意味。

103. 「たたかうこと三日にして」——J въ ·Г· (А Зи) день Kajaly 河畔のたたかいの三日め、すなわち 1185 年 5 月 5 日、日曜日とさします。なお J 70 参照。

「天日二つながらに」——J два с(о)лнца (PA солнца) Igor' と Vsevolod を指します。なお J 44 “四つの日” 参照。

104. «かくてかのカヤルイーの流るるあたり、光は闇に呑まれてござります。  
 105. «ポーロヴェツびとは得たりや応と、さながら豹のうからのごとく、ロシアの国をばのし歩き、大いなる擾乱は遠くフンの地に及んでおります。  
 106. «恥辱すでに栄光を押し。  
 107. «暴虐すでに自由を打ち、  
 108. «ジフすでに大地をおそう。

「もえさかる火の柱二つながらに」——J *оба багряная стълпа Igor', Vsevolod* の“二つの太陽”から発する二条の光線、つまり両公のひきいる軍勢を指します。

「新月...二つながら」——J *молодая мѣсяца (А мѣ сяца) (РА* はこのあとに、*Олегъ и Святъславъ [А Святъ славъ]* を加える) 年代記 *Ipatij* 本によれば *Igor', Vsevolod* と共に 1185 年の遠征に参加したのは *Igor'* の長子 *Vladimir* と甥の *Svjatoslav Ol'govič* で、1175 年生まれの *Igor'* の子 *Oleg* は加わっていなかったはずですから、*РА* の *Олегъ и Святъславъ* はいかにも奇異に感じられます。またかりに *Svjatoslav* を *Oleg* と同じく *Igor'* の子を指すものと考えとしても、遠征に参加しなかった *Oleg* と *Svjatoslav* のおさない兄弟がたたかいの“三日め”に“闇にかくれた”(J=P *тъмою ся поволокоста*) というのは何を意味するかはなはだあいまいです。この 3 字にかんしてはいろいろの意見が出されていますが、J 103 の *два с(о)лнца* にも、*оба багряная стълпа* にも、いな、“太陽”の *metaphor* をはじめて用いている J 44 の *Д с(о)лнца* (四つの太陽) にすら、なんら固有名詞が附加されておらず、しかもこれらの表現が *context* によって当時の読者には容易に理解できたにちがいないことを考えあわせると、これを後代の(しかも誤った)注釈が本文のなかへまぎれこんだものとする *La Geste* の解釈が、おそらくもっとも当をえているのではないかと思われま。

105. *Р. По Руской земли прострошася Половци, аки пардуже гнѣздо, и въ морѣ погрузиста, и великое буйство подасть Хинови. и въ морѣ* から *Хинови* までの部分は、動詞 *погрузиста*, *подасть* がそれぞれ *dual, sing.* で、前の *прострошася (pl.)* と一致しませんので、たいていの校訂者は *подасть* を *подаста* に訂正したうえ、J 103 *молодая мѣсяца тъмою ся поволокоста* (直訳“二つの新月が闇におおわれた”)のあとへ持って行くのがならわしになっています(例えば *Lixačev, 20, N. K. Gudzij, Xrestomatija, 65*). *La Geste* も *metathesis* には当然同意していますが、ただ 1) *и великое буйство подасть Хинови* は *Р* の位置にとどめ、2) *и въ морѣ (J* 挿入) *погрузиста* を *оба багряная стълпа погасоста* (直訳“二つの真紅の柱が消えた”)のあとへ移しているのが新しい試みです。理由としては、1) については *Zadoščina* の *parallel passage* が *Р* の順序を支持していること、2) については、年代記 *Ipatij* 本の“*путь съ 15 мужь утекли, а ковуемь мнѣ, а прочии в морѣ истопоша (N. K. Gudzij, Xrestomatija, 74* 参照)が示すように、「海へ沈んだ」(*въ морѣ [ся] погрузиста*) のは、“二つの新月”ではなく、“二つの真紅の柱”つまり *Igor'* と *Vsevolod* の軍勢であること、をあげています (*La Geste, 87 f.*)。

「フンの地に」——J (=РА) *Хинови Xinъ (sg.), Xinove (pl.)* は、*La Geste, 123* によれば *Hun* 族のスラヴ名で、*Slovo* ではみずからをその後裔と考えていたハンガリア人を指します。「擾乱がハンガリアに及んでいる」というのは、*Igor'* の敗戦によって、ロシアの西方の敵たるハンガリアもまた活潑な動きを見せはじめたことを意味します。現に 1188 年、ハンガリア人の王 *Bela III (1173-96)* が、*Jaroslav* の死 (1187) 後おこった *Galič* の内乱に干渉し、息子 *Andrej* を一時 *Galič* の公位につけたことはこのことを端的に証拠だてています(除村吉太郎訳、ロシア年代記、490 ff. 参照)。

108. 「ジフ」*Div* については J 29 の注参照。

109. 「ゴートのうましおとめら」——J *Готьскыя (Р Готскія) красныя дѣвы* このゴート人は言うまでもなく、XVI-XVII 世紀ごろまでクリミアに残っていたクリミア・ゴート族 (*Krymskie goty*) を指します。XII 末、クリミアは *polovcy* の勢力範囲だったので、彼らの戦勝によってクリミアの港に多数の奴隷がもたらされた場合、この地方のゴート族もまた経済的にうるおったであろうことは容易に想像されるところです。

「ありし日の悲運をしのび」——J *поють (Р поють) время бусово (РА Бусово)* *РА* の *Бусово* は、伝統的には、*Jordanes* の *Getica, 246* に出る、376 年ゴート族の王 *Vinithar* に殺された *Antes* の王 *Boz (Booz)* の名から作られた所有形容詞と解され、したがって *поють время*

109. « ゴートのうましおとめらは、青海の岸べに歌声とどろかせ、ロシアのこがねうち  
ならしつ、ありし日の悲運をしのび、かのシャロカンの恥すすぎ得たりとふしお  
もしろくはやしておれど、
110. « われら従士の面々はむなしく歡喜にかわくのみ »

Бусово はゴート人の少女たちが、ゴート族の Antes (つまり東スラヴ人) にたいする勝利をたたえる、という意味に解釈されています (Lixačev, 430; Nahtigal, 83 参照)。La Geste は、РА Бусово を J 98 で“からす”の形容詞として用いられたと同じ語と考え、время бусово を время хмурое (192), ce temps lugubre (59) 等と訳しています。もっとも、このフランス訳は“(現在のロシアにとって)暗い時代”という意味をあらわしているようですが、もうひとつ“(昔の, Šarukan がロシア軍に敗れ, polovcy が, したがってまた goty が悲境に沈んだ) 暗い時代”という解釈もなり立つうえ、この方が context によりよく適合するように思いますので、かりにその意味にとって上のように訳しました。

「かのシャロカンの...はやして」——J лелѣють мечь Шароканю polovcy の汗であり, Igor' とたたかった polovcy の汗のひとり Končak (J 42 参照) の祖父にあたる Šarukan については、年代記 Lavrentij 本 1107 年の項に次のような記事があります: “その同じ年に, Bonjak, 老いたる Šarukan 及びその他多くの公たちが来て, Luben の周辺にとどまった. Svjatopolk, Vladimir, Oleg, Svjatoslav, Mstislav, Vjačeslav, Jaropolk が polovcy を攻めるために Luben にむかい, 昼の 6 時限に Sula を渡り, 彼らに対してときをあげた. polovcy は驚愕し, 恐怖のあまり軍旗をすら立てることができず, ある者は馬にとびのり, ある者は徒歩で, 逃げ出した. わが軍は彼らを追いつつ彼らを殺しはじめ, 他の者は手でとらえはじめた, そして Xorol にいたるまで彼らを追った. Bonjak の兄弟 Taz を殺し, Sugr とその兄弟を捕えた. Šarukan はかろうじて逃れた (Pov. vr. let, op. cit., 186; 原文省略).” polovcy, したがってまた goty の立場からすれば Igor' 軍にたいする 1185 年の大勝によってこの Šarukan の敗戦の復讐 (мечь) がなしとげられたことになるわけです。